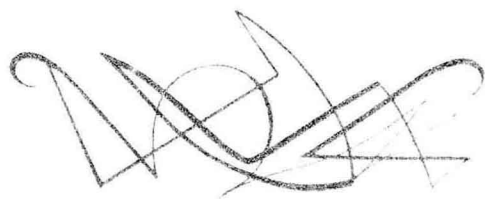


新書

日本文學
全集

37

與謝野寬與謝野晶子
窪田空穂
吉井勇集
若山牧水



日本現代文學全集・講談社版 37

與謝野 寬 與謝野 晶子
窪 田 空 穂 吉 井 勇 集
若 山 牧 水

編 集 整
伊 藤 郎
龜 井 勝
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉

37

編集

定價 500圓

© KODANSHA 1964

寛子ひろしは穂勇ほむゆうの水
晶あき空うつそに
野の野のの田井たゐ山やま
謝さ謝さ田井たゐ山やま
と與よ與よ窪吉くわきち若わ
著者

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3~19
電話東京 (942) 1111 (大代表)
振替東京 3 9 3 0

印刷製本函革	大日本印刷株式會社	株式會社	興陽社
表紙クロソ用紙	株式會社	大進堂	
糊工用紙	株式會社	岡山機器所	
文貼用紙	株式會社	第一紙井	
兩面並用紙	日本クロス工業株式會社		
見取用紙	日本加工製紙株式會社		
	日本製紙株式會社		
	安倍川工業株式會社		
	菱製紙株式會社		
	神崎製紙株式會社		

與謝野寛	與謝野晶子
窪田空穂	吉井勇
若山牧水	集
	目次

卷頭寫眞

與謝野寛集

東西南北	七
紫	三九
相聞	五七
鴉と雨	九
亡國の音	二六

作品解説	山本健吉	二八
與謝野寛入門	木俣修	三九
年譜		四〇五
參考文獻		四三七

與謝野晶子集

みだれ髪	二二
戀衣	二七
舞姫	三三
夏より秋へ(抄)	四〇
作品解説	山本健吉 三八
與謝野晶子入門	木俣修 三六
年譜	四二
参考文献	四三

窪田空穂集

まひる野	一三
土を眺めて	一〇三
鏡葉	三三
作品解説	山本健吉 三八
窪田空穂入門	木俣修 三九
年譜	四七
参考文献	四三

吉井 勇集

酒ほがひ……………三二七

人間經……………三六三

作品解説……………山本健吉 三八八

吉井勇入門……………木俣 修 四〇〇

年 譜……………四三四

参考文献……………四四五

若山牧水集

別 離……………三〇七

路 上……………三二三

山櫻の歌……………三九九

作品解説……………山本健吉 三八八

若山牧水入門……………木俣 修 四〇三

年 譜……………四三三

参考文献……………四四六

與謝野寬集

あるど先づこの本

らげにくらげ去り

その頃くけぶり

梅より呉る

室

東西南北

東西南北敘

方今我國の文學に於て最も屬望すべきもの、二あり、何ぞや、曰く、戯曲、曰く、新體詩、是れなり、戯曲は姑く之れを措き、新體詩の何故に然るやを述べむに、古來吟詠する所、和歌と漢詩と、之れあり、就中和歌は一種の擬古體にして、其文字制限ありて、僅に一片の情緒を擲ぶるに止まる、時に長篇なきにあらざるも、慣用の方式に拘はり、言句の多き割合には事項の見るべきもの少く、吾人をして華にして實なきの嘆あらしむるを奈何せむ、漢詩は和歌よりも一層發達せるものにして、之れを作り、之れを誦すれば辭を解き閑を遣るに足る、然れども漢詩の到底吾人の意に快からざるものあり、是れ他なし、漢詩は支那の文學なり、我邦の文學にあらず、漢詩を盛にするは我邦を忘れて支那の力を致すなり、猶直接に之れを云へば、漢詩を作るは我邦人の輕蔑する支那人の糟粕を嘗むるなり、猶も男子と生れ、廉耻の何たるを知れる以上は豈に獨り支那人の糟粕のみに戀々たるべけむや、是故に吾人は已に擬古體の和歌を排し、又支那人の餘唾に本づく漢詩を廢して、別に我心情をあらはすべきものを求め、遂に新體詩と稱する國詩を作り出だせり、假令其成效の如

何は未だ豫知すべからざるも、已に我邦に於て文學の新區域を開拓せるや疑なし、初めは新體詩に向ひて攻撃を試み、尙ほ陳腐なる擬古體を挽回せむとするものありたれども、一たび震盪したる激浪は滔々汨々として遂に大潮流を成し、將に底止する所なからむとす、與謝野君鐵幹曾て落合直文氏に學び、和歌を作るに巧なり、然れども其時勢を見るの速なる、蜜に思を新體詩に凝らし、作る所數十篇あり、其中見るべきもの少しとせず、頃其韓山風雲の間に得る所のものを加へて、東西南北と題し、世に公にせむとす、蓋し亦新體詩派の爲めに一勢力を添ふべきものならむ、因りて平生思ふ所を卷端に書して、以て之れが序となす、

明治二十九年七月五日

井上哲次郎識

序

京都の地たる、山うるはしく、水明かなり。そこに住むものは、おのづから、歌よむ情の起るらむ。與謝野鐵幹は、京都の人なり。歌にたくみななるも、その故にや。鐵幹は、わが淺香社の社友なり。社友三十名前後、いづれも、その歌に、一種の特色を備へ居るが、鐵幹の如きは、雄々しき調を以てまざるのか。鐵幹、このごろ歌集を出さむとて、そのはじめに、余の歌論をしるさむことをとむ。余の歌論は、鐵幹のよく知るところ。今、あらためて、なにをかい

月、また、をかしきにあらずや。これに反して、鴨川のひなびたる景色は、いかに。嵐山は、松ふく風、すゞしくして、ふりくる雨、また、おもしろきにあらずや。これに反して、東山のいやしげなるながめは、いかに。今の世の、新體詩とかいふものを見るに、鴨川のほとりに、絃歌の聲をきくが如く、また、東山のふもとに、洋燈の光を見るが如くなるにあらずや。余は、鴨川と東山とのひなびたるをけしき、いやしげなるながめたることは、はやく認めたい。水を受せむには桂川、山を貫せむにはあらし山といふことをば、はやく見したり。鐵幹もまた、これに對しては、異議なからむ。さはいへ、桂川にむかひて、驚浪、龍門を下る勢をもとめらるべきか。嵐山にむかひて、峻た、晴空に聳ゆる姿をもとめらるべきか。そはまた、白河と比叡の山とあるにあらずや。鐵幹の歌を見るに、桂川あらし山は見終りて、深く白河にさかのぼり、たかく比叡の山にのぼらむとするものゝ如し。その志、壯とやいはむ、快とやいはむ。余、この夏、ぬしの故郷なる京都に遊び、白河に、比叡の山に、暑を避けむとす。鐵幹、歌集の出づるをまち、そを携へて、來り訪へ。水聲激するあたり、白雲深きところ、手をととりて、歌論をなすも、また、一快事ならずや。

七月六日の夕つかた

萩の家の主人 直文

東西南北に題す

ふる草は、かれく／＼して、
にひ草は、色あさき野に、
たのしく、芽ぐむ二葉よ、
なればそも、いかなる種ぞ。

一とせの、 はかなきものか、
 冬ごもる、 ねづきものか。
 その二葉、 こたへてはいく、
 おひさは、 我も知らねど、
 あめつちの、 力のまにま、
 萌出で、 かこそ立てれ。
 うらぐと、 照れる日影を、
 うらあふぎつつ。

丙申の歲

鍾禮舍主人 鷗外

序

歌を論ずるはやすくして、歌をよむはかたし。近ごろ、歌を論ずるもの陸續として出づ。然れども、その論のよきに似ず、その歌の感すべきがすくなきは如何。などか歌を論ずるに先だち、みづから歌をよみて、人の模範とはせざる。その順序をあやまれるにあらずや。わが友鐵幹君の歌における、よく論じ、よくよみ、早く一家を成して、長短、意の如くならざるなく、殊に長篇にたけたり。事を敘し意を舒ぶる、雄大に、豪放に、専ら氣を主として、區々、辭句の間に纏束たざるが如く、しかも、微をつらぬき、密をとし、趣あり、情あり、讀者をして、覺えず掌を拊ちて、快と呼ばしむ。まことに、平生の論にそむかざるなり。されば君は、從來の纖弱なるものをのみ歌と思へる世に立ちて、大聲疾呼し、必ず雄篇の出でざるべからざるを説き、爰に先づ自ら、近作若干を集めて、一冊とし、以て大世の批評を乞ふところあらむとす。その進取の氣、敬服に堪へず。序を徴せらるゝにあたり、一言することかくのごとし。

明治廿九年七月一日、さみだれ初めて

序

晴れ、若竹の葉風涼しき窓の下にて、
 しらがしのやのあるじ、鯛一しるす。

今の世の歌は、大よそ、二つにわかれたるがごとし。その一つは、詞をも心を、占めかしく、よみ出づるものにして、その一つは詞をも心を、なるべく、今やうに、よみ出でむとするものなり、されば、一つは賀茂川の流をたどり、一つは香川の雫をくめりなど、人はいふなり。さはいへ、共に一つの形式を守りたれば、新調といふも、必しも新ならず。いひもてゆけば、一つ道におつめり。こゝに、我友與謝野寛氏は、常に今の世の歌の、吟ずるに足らざるを憤りを人なるが、この頃尋ねきて、議論は功少し、我は、わが思ふところあれば、みづからの歌を、世に公にせむとす。いかで、一こと添へずといふ。見るに、その集の名の、東西南北といふさへ、めづらしきに、よみ出でられたる長歌短歌など、その體、全く、今の世の歌人の流と異なり。この書、一たび世に出でなば、はむる人、そしる人、その議論いくばくぞ。おのれも、未だその形式の、全く備りたるものとは、思はざれど、かの賀茂香川のしづくをのみくみて、歌とおもへるものなり、遙にその志の遠大なるを、よろこぶものなり。さるは、歌はもとより、一つ心よりおこりて、萬づの言の葉となれるものなれば、たゞ形式にかゝはりて、詞をかざり句をねるをのみ、つゝむるものにあざればなり。あはれ、よく讀み味ひてよ、東西南北の人。

明治廿九年七月、梅雨ふりつく窓のものとて。

東西南北の序

藤園主人 小中村義象

風は心無きものなり。それすら東に行き西に至り、南に奔せ北にかけり、木を抜き水を溢れしめ、雲を飛ばし砂を捲くときは、怒るが如く、泣くが如く、跳ぶが如く、吼ゆるが如き聲、その間よりぞ起りける。人は感ぜ易きものなり。然れども足門の内を出でず、目鼻の外に及ばずば、何をか言ひ何をか歌はむ。假令言ふこと有りとも、歌ふこと有りとも、席の上にして水泳ぐすべを論らひ、盲にして色の好惡を定むるが如きことぞ多からまし。こゝに蘇鐵の屋寛といふぬし有り。歌よむわざに長けて、體の長き短きを言はず。旅行くことに慣れ道の遠き近きを言はず。年まだわかれば、その業ますます進むべく、身な性弱されねば、その志遂ぐるに易からむ。後の人畏しとは、かかるをいふべき。鐵に二六新報社に在りて、日々勇ましきしらべをうたひ、尋ぎて朝鮮に渡りて、しばしば危きさかひに臨みき。この頃歸り來て、わがふせ菴を訪はれしかば、別れて後の言の葉を聞かむとせしに、はゝゝみて言はす。後二日經てのふみに、わがよめる歌どもを、こたび東西南北となづけて、すりまきにせむとす。はしがきてよとあり。ぬしの名におふ與謝の海や、天の橋立まだふも見ぬほどは、いかゞあらむと躊躇ひつれど、東西南北といふ名、まづいと面白く、この名に由りて、その歌ども、必ず木を抜き水を溢れしめ、雲を飛ばし砂を捲くきほひ有りて、はた怒りつ泣きつ跳びつ吼えつする、大風の如きしらべならむことの推測らるれば、一日も早く世に公になりなむことのねが

はれて、得も辭ことまず拙き一言を添へたり。いでや、このふみ出でなば、席の上にして水泳すいようの術を誦ひ、首くびにして色のよしあしを定むる輩は更なり、我を除きて世に歌うたよみはなしと誇り高ぶり思ひあがるらむ人も、背せに汗あせの流るゝふし無きにもあらずやあらむ、いかゞあらむ。

明治二十九年六月二十三日

坂 正臣

東西南北序

鐵幹、歌を作らず。しかも、鐵幹が口を衝いて發するもの、皆歌を成す。其短歌若干首、之を敲けば、聲、釣鐘てうかねの如し。世人曰く、不吉の聲なりと。鐵幹自ら以て、大聲は俚耳りじに入らずと爲す。其長歌若干首、之を誦するに、壯士劍に舞へば、風、木葉を振ふが如し。世人曰く、不祥の曲なりと。鐵幹自ら以て、世人皆醉へり、吾獨り醒めたりと爲す。鐵幹自ら恃む所の、何ぞ夫れ堅にして頑なるや。余も亦、破れたる鐘を撃ち、錆びたる長刀を揮うて舞はむと欲する者、其力足らずして、空しく鐵幹に先鞭せんべんを着けられたるを恨む。今や鐵幹、其長短歌を集めて一卷と爲し、東西南北といふ。余に序を索む、余、鐵幹を見る、日猶淺し。之に序する、余が任にあらず。然れども、其歌を知るは、今日に始まるに非ず。其歌集に序する、亦何ぞ妨けむ。乃ち序をつくる。

明治二十九年七月一日

東京上根岸僑居に於て、

子規子しるす。

序

これ有り、鯉こいが鰓はらになるにもあらず。これ無し、

鰓が鯉になるにもあらず。序と申すは、まことに、つまに副へたる生妻なまよめの如きものなり。われ嘗て新體詩見本を作る。鐵幹調に曰く。

鯉は上野か淺草か

白きを見れば夜ぞ更くる

『姑蘇城外寒山寺』

數ふる指も寐つきつ

首纏らんか鳩の海

ぶら下らぬぞうらみなる

身をば投んか驚の峯

もぐり込まぬぞ憾みなる

小楊子むづと手に執りて

喉笛美事に撞切れば

ちよいと痛めど血は出でず

死するも命別儀なし

『天地玄黄千字文』

無理心中は止むべきぞ

前幽にてつみ玉ふとも、二へぎ入れて頼じ方常

の如くし玉ふとも、御勝手なり、ひねともやし

と、わが問ふ所にあらず。序に代ふ。

病床に於て 正直正太夫

題詞

吾曾誦君句。每每愛清新。

險語驚天下。奇才笑古人。

深山森虎豹。大澤莽荆榛。

一劍三千里。歸來筆有神。

青崖山人

東西南北をよみて

から山に駒をとめてうたひけむ

高きふしこそ世に似ざりけれ

佐々木信綱

道のためつくせや吾せますらをの
常にとらむはつるぎのみかは
八重むぐらおひ繁りたる草むらに
そびえてたかし杉のひとつもと

自序

小生の短歌と、新體詩とを輯めたるもの、この

『東西南北』に御座候ふ。

小生、八歳にして郷里西京を出で、東西に馳驅すること、茲に十五年。風塵に没頭する餘暇、興を遣り、悶を慰するものは、詩歌に候ふ。故に、小生の詩は、自身に樂むで後、その樂を、人に分つもの、多數を占め居り候ふ。小生の詩、幼年より、聊かの草稿をも、とどめ來らず候ふ。顧ふに、短歌をよめることは、七千首以上なるべしと覺え候へども、記應に存するものとしては、その五十分の一にも過ぎず候ふ。されば、この四五年間の、新聞雜誌に見えたるものと、小生の記應に存するものとを擇んで、この一卷と致し候ふ。

小生の詩は、短歌にせよ、新體詩にせよ、誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるものにもあらず、言はば、小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ。

小生の詩に、初めて知を辱うしたるは、落合直文先生に候ふ。要するに、先生の懇懇なる策勵にして無かりせば、今日この一卷を公にする勇氣の如きも、生ぜざるべく候ふ。先生の淺香社、由來、靈才れいさい燭陽しよくやうの士多きに係らず、先生の、小生を捨て給はざること、十年なほ一日の如くに候ふ。小生は、この一卷を公にするに當りて、特に師恩の高大なるを思ひ、未だ、其萬一にだも報じ奉るところなきを、慙愧致し候ふ。

師の令弟鮎貝城園君は、小生の益友に候ふ。意氣相投じ、肝膽相許すこと、茲に五年。共に同一の事業に従ひて、曾て一日も争はず。その詩、また志を同じうして、互に磨礪するを常と致し候ふ。君久しく、韓山に留りて歸らず。『東西南北』の印刷前、一たび君が細評を煩すの暇なかりしを、遺憾に思ひ候ふ。

會て、小生の詩に『露骨』との評を賜ひしは、帝國文學記者、青年文記者の兩君にして、『生硬難雜』との評を賜ひしは、六合雜誌記者、太陽雜誌記者の兩君なりしかに覺え候ふ。小生が、一時、現代諸名家の歌評を試みし際に、宮内省派をして、顔色なからしむるも、得る所なかるべし。寧ろ、意を轉じて、少年詩人の誘導に、盡力せずやといへる意味の勸告を賜ひしは、小日本新聞記者の君にして、又、新體詩の新體詩らしきもの、我れ初めて、鐵幹に於て之を認むとの評を賜ひしは、日本新聞記者の君なりしと存じ候。この外、小生の詩に對して、從來批評を賜ひし諸君、少からず。早稻田文學記者、太陽雜誌記者兩君の如きは、屢々、小生の惡詩に向ひて、過分の注意を加へられしが如し。抑、毀譽何れにせよ、小生は諸君の批評に由つて、小生が、發憤自勵の念を増したることを、幸榮と心得候ふ。こゝに、謹で諸君に對し、滿腹の敬意と、謝意とを表し申し候ふ。

本書は、得るに従ひて、編輯せしもの。前後の順序もなく、聯絡もなし。小生の、萬事に疎放なること、今に改らず。御推恕を願ひ候ふ。

小生は、詩を以て世に立つ者にあらず候へども、短歌にもあれ、新體詩にもあれ、世の専門詩人の諸君とあれ、大に反對の意見を抱き居る者に御坐候ふ。されど、最早議論の時代にあらずと心

傳候へば、申し述べ候ふ。

世に、駄評家多し。小生は、本書に對し、何卒、眞面目なる、詩的批評を賜らむことを、切望致し候ふ。

明治廿九年六月十七日、東北、宮城巖手青森諸縣、大海嘯の慘狀を想像しつゝ、著者自ら、東京の寓居に識す。

無題二首

野に生ふる、草にも物を、言はせばや。

涙もあらむ、歌もあるらむ。

花ひとつ、緑の葉より、萌え出でぬ。

戀しりそむる、人に見せばや。

軼廷に、十月八日の變ありて、未だ二句ならざるに、諸友多く、官にある者は、歸朝を命ぜられ、民間にある者は、退歸を命ぜらる。余もまた、誤つて累せられむとし、幸に僅にまぬかる。こゝに於て、一時歸朝の意あり、諸友中、廣島に護送せらるゝ者と、船を同じうして、仁川を發し、宇品に向ふ。船中無聊、諸友みな、詩酒に托して興を遣る。當時、余また數詩あり、その記題するものゝ一に云く。

からくくと、笑ふも世には、憚りぬ。

泣きなばいかに、人の咎めむ。

廣島獄中の諸友に寄せたるもの。

罪なくて、召さるゝもまた、風流や。

ひとやの月は、如何にてららむ。

子規

世に出でし、人は歸るを、わすれけむ。

むなしき谷に、啼くほととぎす。

棄婦

いねとある、このふみもなほ、君の手と、

思へばなかく、裂かれざりけり。

得意の詩

都を出でて何地ゆく、

しばしは語らへ駒とめて、

君と飲まむも今日かぎり。

『西陽關を出づれば故人無し。』

ゐなかに行かば美き酒も、

顔よき乙女もあらざらむ。』

我友は、軽くひとつき飲みほして、

たかく笑ひぬ、からくくと。

大男兒、王侯の手を握らずば、

一枝の筆を杖とせむ。

天下の山天下の水、

われを迎へて餘りあり。

君見ずや、失意の時こそなかくに、

得意の詩篇は成るべきぞ。』

心

うるはしく、心はもたむ。飛ぶ蝶を、
まねくも花の、にほひなりけり。

廿八年の夏、京城にありて。

思ふこと、いはむとすれば、友はあらず。
さよふけてきく、山ほとゝぎす。

西京比叡山の麓に住みける秋。

雲はみな、浮世に出でて、山里に、
のこるは月と、我となりけり。

鸞輿向西（廿七年九月十四日作）

御車は、今か出づらし。むらさきの、
雲間になびく、大御旗。
常ならば、このいでましも、須磨明石、
月の行幸と、いふべきを。

三國干涉の事などきゝて、鐵幹
のもとに。

京城にて 槐園

國のため、家をも身をも、妻子をも、
ぬすれし袖の、なにに濡れけむ。

槐園に復す。

口あきて、ただ笑はばや。我どちの、
泣きて甲斐ある、この世ならねば。

僑居偶題

書冊の塵ははらはねど、
仔細に太刀の錆は見る。
よし貧賤に身はおくも、
捨てぬ丈夫の意氣一つ。
去年の夏のこのごろよ、
われ韓山に官を得て、
謀るところも多かりし、
それも今更夢なれや。
世は慨くまじ徒らに、
小吏の怒りを買ふばかり。
詩は廢せむか終にただ、
才子の名のみ残るらむ。
竹籬々門を閉ぢ、
窓にはなびく茶の烟。
石落水を引き、
池にはをどる魚の影。
しばし疾をやしなひて、
都にちかき假りずまひ、
こゝも浮世をのがれねば、
猶もくるしむ午の熱。
おもへば去年冬の旅、

雪に鳥嶺の險こえて、
一こゑきける虎の聲、
いかに心もさむかりし。

『太陽』といふ雑誌の紙上、明治新體詩家中
に、君の名をも、つらねありと、人のいふに。

風流男の、名だに耻ぢしを、歌よみて、
世に誇る身と、いつなりにけむ。

櫻花十首

富士の山、のぼりもはてぬ、しら雲は、
麓の峰の、さくらなりけり。
ひく汐に、さくらちり浮く、おぼろ夜は、
龍のみやこも、春やしるらむ。
さきにほふ、千鳥が淵の、山ざくら、
春のふかさは、知られざりけり。
隅田川、花やちるらむ。漕ぐ船の、
筥に色ある、夕あらしかな。
恥しらぬ、人に見せばや。時ぞとて、
かるくちり行く、山ざくら花。
姫君の、琴の音やみて、高殿は、
花のふぶきに、なりにける哉。
月ひとつ、堤に花の、かげ多し。
笛ふく人は、船にやあるらむ。
わが駒も、一こゑなきぬ。高嶺より、
櫻ふき捲く、山おろしの風。
あら驚の、つばさや觸れし。高嶺より、
枝ながらちる、山ざくら花。

日の本の、櫻のあらし、吹きにけり。
千里の海の、花のしら浪。

正岡子規君を訪ひて

君が閑居を音づれて。
おどろく君が獲せたるに。
世をも人をも思はずは、
かゝる病もなかりけむ。
權貴に媚びて私利のみ、
はかる詩人の多き世に、
君が吐く血の一滴も、
思へば得がたき賜や。

此夏六月七日、友人黒崎美知雄
の、吉野艦に便乗して、再び臺
灣に赴くを送る。

萬里の浪に船うけて、
南の島に復も行く、
ますら猛夫のころさし、
腰なる太刀や知るならむ。
野には檳榔みのるなり、
山にはレモン花ぞよく。
島夷の酒の甘きには、
しばし愛もわするべし。
淡水の市雨すきて、
基隆の港月ぞすむ。
夜半に少女の歌きかば、

いかに快やしほるらむ。
去年總督にしたがひて、
戦記つづれるその筆に、
山河風土の奇をかくも、
またつれづれの興ならむ。
花はさくら木ひとは武士、
武士によき名の吉野艦、
けふ横須賀を舟出して、
載せても行くか快男兒。
友の壯圖を送るとて、
この一篇の詩は賦せど、
都を出でて遠く行く、
宰相の意は我れ知らず。

神儒佛三道のことなど、人の語
るに。

桃さくら、吹くは一つの、春かぜを、
しろきあかきの、花もさくらむ。

大磯にありける夏。

夕立の、雲は沖より、めぐりきて、
汐の雨ふる、磯の松原。

夏の初、駒込に住みて。

薄紅葉、しぐれにぬるゝ、こゝちして、
檜の若葉に、むら雨のふる。

この夏、人の三周忌に。

ありあけの、行方を追ひし、みやびをの、
たよりはきかむ。山ほとゝぎす。

幼くて、題詠の歌などよみける
頃、『名所新樹』といふことを。

三輪の山、なべて若葉の、夏くれは、
尋ねぞわぶる。杉立てる門。

詩友北村透谷を悼む。

世をばなど、いとひはてけむ。詩の上に、
おなじころの、友もありしを。

幼き頃、かゝる口つきの歌もあ
り。

梅もどき、こぼれそめけり。蜘蛛のいの、
かゝる伏屋の、秋もいぬらむ。
夕かぜに、尾花の袖は、まねけども、
暮れゆく秋は、とまらざるらむ。

放魚

盆地三尺みづあさい。
汝が身をおくに足らざらむ。
行けよ行け、今放つ。』

世は濁れどもその中を、
たどりたどらば一筋の、
清き眞水の無からむや。

籠鷄

籠の中なる庭つ鳥、
餌に飽くことを何ほこる。
知らずやあはれ煮らるべき、
うつはは前にあるなるを。

春の暮に旅行するとして。

都出でて、春の行方を、いざ追はむ。
いくその里の、花のしら雪。

槐園と賦す。

おなじ道、おなじ眞ごころ。二人して、
いざ太刀とらむ、いざ筆とらむ。

涼車、御殿場にいたれる頃、奇
寒骨に徹して、夢たまく覺む。

富士の根の、神代の雪に、臥すとして、
さむれば富士の、麓なりけり。

攝津の住吉に遊びて。

住の江の、松原ゆけば、すがくし。

神代ながらの、風の音する。

住吉神社に詣でて、幼時、この
地に住みしことなど、思ひ出づ。

うき身には、神のちぎりも、たのまれず。
祈りてあだに、十とせ經にけり。

巢鴨の里にすみける春。

椎の實の、しづむ古井も、春めきて、
泡だつ水に、かはづ啼くなり。

賤が家の、山吹きけり。あるじには、
歌よむほどの、少女子もがな。

乞兒らが、着すてし野邊の、朽ちむしろ、
朽ち目よりさへ、さくすみれかな。

嵯峨の花見に行きて、途上、雨
にあふ。

鋤きかへす、牛の背しろし。雨まじり、
櫻ふき下ろす、山おろしの風。

秋日鴨東に飲む。席上、歌妓某に代りて、その
情人の、獨逸に留學せるものを懷ふ。

梧の葉を、けき吹く風も、君がます、
西としきけば、嬉しかりけり。

妓に代りて。

思あれば、千すぢの紋も、しらべてむ。

何に三すぢと、人は定めし。

擬從軍作二首

野をゆけば、朝露きよし。すたれたる、
あだのとりでに、月なほ残る。
日は暮れて、時雨は雪に、なりにけり。
とりでは遠し。駒はなづみぬ。

ねがひ

かれもがな、これもがな。

ねがひは多し、身はいやし。

成らぬねがひと、知りながら、
わが勇氣をば、試めし見む。

雜感十首の一

くらゐ山、あやしき神に、手向して、
やすげに上る、友もありけり。

失題

たのしいといふも、おろかなり。
くるしいといふも、おろかなり。
千とせ八千とせ、たばとて、
この世ながらの、この世かな。
大詩人、小詩人、
なにかさばかり、あらそはむ。

人を神ぞと、いつはらず、
人は人ぞと、うたへかし。

月

世のなかに、秋より外の、里もがな。
思ふことなく、月やながめむ。

虫聲

夕月夜、野を分け行けば、葛の葉の、
高きあたりに、松虫のなく。

駒込に住みける秋。

露とのみ、秋はかぎらず、松の葉を、
わたる風にも、袖はぬれけり。

豊公

人の靴、とりてささげし、手のひらに、
天が下をも、もてあそびけむ。

京城に秋立つ日、槐園と共に賦
す。時に、王妃閔氏の專横、日
に加はり、日本黨の勢力、頓に
地に墜つ。

韓山に、秋かぜ立つや、太刀などで、

われ思ふこと、無きにしもあらず。
から山に、吼ゆてふ虎の、聲はきかず。
さびしき秋の、風たちけり。

おなじ折、槐園の歌に。

萩の葉を、けさ吹く秋の、初かぜは、
襟をただして、聞くべかりけり。

京城守備の後備兵、秋に入りて、
未だ現役兵と、交代歸朝すべき
の命なし。

戈まくら、親おもふ人の、夢をのみ、
韓山おろし、吹かずもあらなむ。

極園と、全羅道の木浦に、航する舟中。
あら浪の、八重の汐路も、まどろみて、
見れば見るべき、夢はありけり。

木浦鎮に、鈴虫松虫の類多し。

はなれ島、磯回の月に、松むしの、
まつてふ聲は、誰がとどめけむ。

全羅道の、珍島に宿しける夜。

松千株、雨かときけば、月さえて、
沖のはなれ島、ただ八重の浪。

雑感十首の一

世をいり、鼎もあらば、烹て嘗めむ。
甘き舌のみ、多きところかな。

根岸に住みける夏。

青柳の、かげゆく水に、月見えて、
水鶏なくべく、夜はなりにけり。

河内に遊びける夏。

野づかさに、浮世の夏を、逃れきて、
ひとり風もる、身こそ安けれ。

仙臺紀行の中に。

馬あらふ、里の小川の、水上に、
夕顔さけり。月あかくして。

正月を木曾山中に迎ふ。

杉の葉の、雪もくだけて、あら驚の、
つばさより立つ、春の初かぜ。

八重の浪 (友の南洋に行くを送り
て廿六年八月の作)

千里ふく、沖つ汐風に、真帆あげて、
益荒猛男の、わが友は、南の洋の、
鰐のすむ、マニラを掛けて、出でて行く。

いたづらに、行く旅ならず、事成らば、
御國の榮え、身の譽れ。功とく立て、